案内パンフレット、足立スタンプラリーの台紙、荒綾八十八箇所巡礼の納経などを希望の方は寺務所に申し出て下さい。

明王院だより

第１号
２００７年８月１日
明王院（赤不動）
〒123-0851 足立区梅田4-15-30
TEL 03-3852-7378

回向堂が完成

平成十七年より進めて参りました回向堂（えこうどう）の改築工事が無事終わり、去る三月三十一日に落慶式を行ないました。

回向堂は、先代住職順赫和尚が中心となって昭和二十八年に建立され、以後、明王院における「回向」の中心道場として、檀信徒の皆様に親しまれてきました。しかし、近年、老朽化による床の緩みや雨漏りなどが生じるようになり、症状がひどくなるたびに問題箇所の修理を繰り返してきました。さらに、平成十六年の中越地震の際には、お堂南側の漆喰壁の大半がはがれ落ちるといったことも起こりました。こうした状況を踏まえ、安全の確保のためには、個別の修理で対応することはもはや限界であり、抜本的な改築が必要であるとの判断に至りました。

平成十七年の六月に旧いお堂を取り壊し、翌月から新堂の建築工事を始め、十八年十一月に建物自体の工事は終わりました。以降は、建物内部の荘厳を整えたり仏具を配置するなどの作業を進め、去る三月三十一日に落慶式を執り行うに至りました。

落慶法要当日は、関原大聖寺の住職で総本山長谷寺ご重役でもある石井大僧正を導師、近隣関係寺院ご住職を職衆として、檀信徒や工事関係者をはじめ約三百名の方々の参加をいただきました。檀信徒の皆様には、今回の建築に際し、物心両面にわたり、篤いご援助をいただきました。ここに、あらためて、厚く御礼を申し上げます。

新しい回向堂は、改築前の旧いお堂と同じく木造ですが、耐震性を高めるため、基礎をより頑丈にし、屋根は瓦葺きから銅版葺きに変えることで、建物への負担を小さくしました。お堂の内部については、内陣の奥にお祀りするご本尊・不動明王像のお姿を外陣でご参拝の皆様からもはっきりとご覧になれるような造りとなり、面目を一新しました。

今後は、年忌法要などを通じて、檀信徒の皆様方にとって、旧いお堂以上になじみの深い場となることを念願しております。

完成した新回向堂

如意輪観音お戻りに

昭和六十一年（1986）以来、足立区郷土博物館で展示されていた、東京都指定文化財の如意輪観音像が回向堂の落慶を機に、当院に戻ってまいりました。現在は、本堂（不動堂）内の厨子にお祀りしております。三月三十一日の回向堂落慶式の際には開帳を行い、多くの方々にお参りいただきました。このお像は、応安二年（1369）の製作という記録が胎内に残っており、法眼院秀という仏師の作です。院秀という仏師についてくわしいことはわかっていませんが、鎌倉で活躍していた院派という一門の流れを汲む仏師であろうと推定されています。

如意輪観音は、変化観音といって観音様の化身の一つとされ、人々の悩みを打ち砕き、さらに財福をも授けて下さるという仏様です。本来、そのお姿は、膝を立て、六本の手があるものなのですが、この如意輪観音には二本の手しか残っておりません。しかし、室町時代の彫刻で作者や年代のはっきりしたものは稀なため、その点でも非常に貴重なものです。

来る十一月九日（金）には、東京都文化財ウィークの一環として、如意輪観音像の公開をしますので、ぜひお参り下さい。

如意輪観音像

みちしるべ

不動尊石像

左に一の弁髪を垂るるは、一子の慈悲を表わす　（弘法大師著『不動尊功能』）

お不動さまは、その顔つきだけでなく、黒いからだ、背中に赤々と燃える炎など、全身、激しい怒りの表情を示している。しかし、この怒りは、ともすれば強情になりがちなわれわれに、自らのあやまちを気づかせるためのものであって、怒りの表情とは裏腹に、お不動さまの心根は非常に優しい。

お不動さまの頭髪には、弁髪といって、髪を編んで垂らしたのが左側に一本あるが、これは、親がわが子を愛するがごとく、あらゆる人々を等しくいつくしむことを表しているのである。

今後の主な予定

９月２０日～２６日　　秋の彼岸

９月２８日　　護摩供
恒例の正五九（一月五月九月）の護摩供養を行います。お札をご希望の方は、一週間前までをめどにお申し出下さい。

１１月９日　　東京都文化財ウィーク
別項で案内のとおり、如意輪観音像を公開します。９：００から１６：００までの予定です。

平成十九年　年回表

一周忌　平成十八年
三回忌　平成十七年
七回忌　平成十三年
十三回忌　平成七年
十七回忌　平成三年
二十三回忌　昭和六十年
二十七回忌　昭和五十六年
三十三回忌　昭和五十年
三十七回忌　昭和四十六年
四十三回忌　昭和四十年
四十七回忌　昭和三十六年
五十回忌　昭和三十三年

こらむ

今年もウナギの恋しい季節がやってきた。どんなきっかけがあったか記憶は定かでないが、小学生の頃からウナギの蒲焼が好物である。

ウナギというと浜名湖をはじめ、日本では養殖が盛んだ。しかし、養殖できるのは稚魚になってからで、稚魚の大半は輸入に頼っているという。また、産卵から稚魚になるまでの生育の過程についてはいまだにナゾの部分が多いそうだ。

この稚魚の輸入について興味深い話を目にしたことがある。稚魚の運搬は空輸であっても、北米など遠くの産地からは半日はかかるので、その八～九割が死んでしまっていた。ところが、試しに稚魚の中に天敵のナマズを入れてみたところ、稚魚の二割はナマズに食われてしまっていたが、残りの八割はピンピンしていたという。

ウナギであれ、仲良しだけよりイヤな奴もいる雑多な環境で過ごすほうがむしろ元気になるということなのだろうか。なかなか教訓的な話ではある。

（R）